

指先

暁めい（土佐清水市）

蝶の羽ばたきが世界を回すように

ささやかながらも確実に

あなたの指先はわたしの頬をなぞるのです

まるで きつい洗剤に

優しく漂白されていくよう

（きっと、それはカタルシス！）

そのまま遙か彼方の空へ

いまの中学生がみんなそうなのかどうかは知らないが、暁さんはしっかりとした自己認識と表現力をもちあわせている。

一連目の恋のはじまりの描写がいい。指先と頬という言葉で高揚感と浮遊感の質感がうまく表現されている。二連目で恋によって浄化されていく自分を認識し、三連目でその甘い誘惑に身も心もゆだねてみたかったが、あふれて

融けてしまえばよかった

（伝う泪はわたしを模^{かたど}ってくれない）

どろりとした不安定さに溺れながらも

わたしはたゆたう黒髪の間隙から

じつと指先を見つめています

くる泪はわたしを形象化してくれない、ただ流れてしまっただけだ、と恋という観念の実体のなさに心ふるわし、最終連の、見つめるのは恋する人の指先、それはわたしをみちびく指針になってほしい、と初々しい感情に満たされた一編。

少年の日

朝比奈富美男（大豊町）

銛を持つ少年の目は殺意に満ちていた
刃を磨き 銛ゴムの強さを確かめ
水中メガネで岩穴に首を突っ込む
ブクブクブク…川藻が揺れている
突然の大きな目 魚の目目目
逃げる魚 隠れる魚 立ち止まる魚
取り残された一匹の小魚は小さくて小さくて
現状把握不能
岩穴の奥には大物がいる

銛で川魚を突く。少年と魚の闘い。
その情景が丹念に書きこまれている。
少年の日、朝比奈さんは「薄明かり
の中に大きな目」の「大物」を突くよ
ろこびに身を震わせていた。しかし「大
物」は一枚上で「弾丸のように逃げ」
てしまった。「大物」が逃げたあとの
岩穴には少年をあざ笑うかのように一
匹の小魚。でも、悔いはない。明日は
突いてみせる。少年の日、魚を突くこ

薄明かりの中に大きな目
狙う 発射 砂煙 飛び散る鱗 ギクギク震え
る銛の柄 やったか？
大物は弾丸のように逃げる
息切れ ガバツとあがる
岩穴には小魚一匹
平和な世界にはエンジンの音

とに懸命になっていた自分はいま「平
和な世界にはエンジンの音」がひびく
世間をそれなりに生きている。少年の
日が鮮烈な記憶となって体内のどこか
に眠っているような気がする。

舌

安部時子（高知市）

有るのがあたりまえで
存在価値も主張もしない
しかしその働きの多様さに
ふいと気付いたのだった

味覚を伝えるのが
主な使命なのだが 外にも
温さを計ったり 小骨や
異物を選び出したり

舌鋒と云うから 語りもし
時には口中で絡み合ひ
官能を高め合ふ
囁きにも罵詈にも必要だ

象の鼻よりも 長い尻尾よりも
細密な機能で 機微があり
控えめなのが いじらしい

舌についての考察。安部さんの指摘するように舌は味覚だけではなく、さまざまな姿を持っている。ふだんはそんなに意識しない存在だが、食欲から官能の世界にまで踏み込めるすぐれものである。ひとの体は舌のある口から一本の穴として肛門まで空洞が穿たれている。人体は一本の空洞に貫かれている。舌はその入口であり、ひとの生存欲望（食欲と性欲）の入口でもある。

そして「控えめなのが」いい。

あなたはのみほした

雨宿り（高知市）

あなたは夏をのみほした
冬も、春も、秋も

あなたのまえに 季節のちがいはうしなわれ
日々はおなじ顔ですぎる

あなたはのみほした あのととき
時代が激流のごとくながれた日々

風が奪うようにあなたの身体を吹いた日々を
その苦しみ、にがみを身体の内から味わった

あなたはあなたのまえに
差しだされたすべてのものをのみほした
死のほかは

いまあなたは夜ごとめざめ

ひとしづく、一滴、満ちてゆく時の器をみつめる
冬枯れる木が

北風のなかでそののこった葉をかぞえるように

一見、シャンソンの歌詞をおもわせるような言葉にリズムを感じた。

青春期、壮年期を過ぎ、中年期にさしかかった作者の感慨の一編。この詩は、メタファによって支えられている詩、とっていい。「のみほした」は言葉どおり作者が呑みこんだ日々＝消費した日々＝なにかを体験した日々、であると同時に作者のおもわくとは裏腹に無意味に過ぎ去った日々、のこと

でもある。この「のみほした」という言い回しがこの詩に独創的な雰囲気を与えている。詩とは、ちょっとした言い回しを自分の手許に引き寄せることでもある。

幼少時代

有沢薫（高知市）

秋の昼下がりに
縁側で眠っていた猫が
時間を背伸びすると
赤いテーブルの上の
コップの水が
痛みを感じた
それくらい澄んだ
秋の一日だった

有沢さんはときとしてすごい詩を投稿してくる。

老年を迎えている有沢さんが幼少時代をふとおもいだす。倦怠感とともに秋の昼下り、少年の、透明で、繊細で、鮮烈で、明晰な、秋の一日の瞬間が、言葉と情景と思索と感性がゆるやかに融和して、言葉だけをとって、イメージだけをとって、そこには「幼少時代」が現前してくる。

「コップの水が痛みを感じた」という表現が秀逸。削る言葉も加える言葉も必要のない一編。読者の想像力を刺激する一編。

読書をやめておまちを歩こう

囀基僧（高知市）

晴耕雨読はひと昔前の習慣

さあ 本をたたみ雑踏にまぎれこみ

肺深く人ゴミの空気を吸いこもう

歩く観察眼となろう

一部には人の足元を見るヘンタイとの噂

ダメダメ 人の噂を信じちゃいけないよ

実際パンツやひらひらスカートから伸びた足

紅黒青マニキュア爪の指の形で

あれはローマ型これはギリシヤ型

そっくり瓜ふたつなのを発見し

二人は親子かもと胸が高鳴る

足下を向く猫背のいかり肩のユーウツ

優柔不断の行ったり来たりのシロクマ

サングラスと帽子を深目の人たらし

きゃびきゃび嬢のノーテンキ笑顔

天衣無縫の機関銃トーク

みけんにシワを刻んでアイスの食べ歩き

人が集まる所は息もつかせぬ面白さ

狂おしく刺激的で都会っぽい

それが大好きのすべてじゃないにせよ

タイトルを読んだとき、不覚にも60年代後半の『書を捨てよ、町へ出よう』の寺山修司を思いおこした（かれはこのテーマで高知市の夏季大学にやってきた。19歳だった頃は不覚にも聞きに行ったことがあったのだ）。70年代半ばには『ノック』と称して劇団員が他人の家のドアをノックしていくという「市街劇」を試みた。寺山は「日常の混乱」を日常へのアンチテーゼとしたが、囀基僧さんは「日常の整然さ」にユーモアをもとめている。しかし、「観察」するだけではわかりえない他

者の内実もある。ここはひとつ、他人の家をノックしてまわった寺山にならって、他人の心をノックしてみてはどうだろう。外見からだけではわかりえない物語がその心に刻まれているとおもう。読者は欲張りなもので、表面的な軽妙さよりも、混濁し困惑し意味不明な内実を楽しみたいものである。もつとも寺山は他人の風呂場を覗くという行為で警察沙汰になってしまった。心をノックするにはそれなりの覚悟も必要かもしれない。

四歳の夏

いそえまぢこ（高知市）

早朝から蟬がやかましく鳴いている
毎年蟬の声を聞くと
私は四歳になる

土間で大きな鉄鍋を囲んで
大勢の子どもたちがはしゃいでいる
黍や豆類を煎っていた
街の子の私は少し離れて見ていた
豆が弾けて一粒私の足元に転んできた

年嵩の子が「やらあ」
「ありがとう」一粒を大事に握って
間借りしている家族の所へ走って
「もろうた」

疎開先で終戦まで二ヶ月程の生活
いつも聞こえてくる蟬の大合唱
深い井戸 小川
ギラギラの太陽 草いきれ
はつきり見える

四歳の夏

条件反射といえば「バブロフの犬」。
メトロノームを聞かせたあと餌を与え
ることをつづけていると、餌を与えな
くてもメトロノームの音を聞くだけで
よだれを垂らす、というものだ。

いそえさんにも条件反射がある。蟬
の啼き声を聞くと疎開先での風景がフ
ラッシュバックしてくる。四歳の少女
が知らない土地でひもじさに耐えた風
景がよみがえってくる。その「どうし

ようもなさ」はいそえさんの原風景で
あり、ここまで背負ってきた。この夏
もその記憶が風景を鮮やかにして訪れ
てくる。その風景に付き合うことも
しかなかったら、いそえさんの一生なのかも
しれない。